1978／5

五月の大型連休を無事に乗り切り、車内の混雑もようやく落ち着き始めていた。

雪も殆ど溶けて新緑が芽吹く季節。爽やかな風を全身に受けながら信越本線を走り抜けながら、長く厳しかった冬を思い起こしていた。

雪深い信越本線では、それなりに整備された白山であっても予想外のアクシデントが起こっていた。モーターの故障、線路が埋もれてしまったり――事前にラッセル車が除雪していても、間を置かずに降りしきる雪の中には為す術がない――そして問題が発生する度に信越本線を管理している新潟局や長野局、所属する金沢局や運転所、そして乗客に迷惑を掛けることになってしまう事が白山には何より辛かった。

こんな過酷な道を走らなくても、と降りしきる雪を前にして何度思ったか知れない。しかし、停車する度に乗り降りする乗客を見ていると、自然と勇気が沸いてきて、頑張ろうと思うのだった。

それに、自分とルートは違えども、同じ雪国を通り抜けて東京と金沢を結んでいるはくたかの事を思えば、自分一人が弱音を吐くわけには行かない、と思う。既に三往復設定されている白山と違い、未だ一往復しかないはくたかは、一緒に碓氷峠を上り下りするエフのような存在がいるわけでもなく、ただ一人でこの白い世界で頑張っているのだ。それでも決してはくたかは弱音を吐かない。いくら辛いことがあっても、ぐっと自分の胸の内に溜めてしまう。そんな人だった。

だから余計に心配になるのだが、はくたかにそんなことを言えばあっさり笑って「大丈夫だよ」と言われて終わりだ。せっかく気持ちが通じ合ったというのに、未だに白山の事を頼ろうとはしてくれないはくたかを思って、白山は溜息を一つ吐いた。

「よう、今日も浮かない顔してんな」

横川駅に到着すると、既にエフがホームで待っていた。車両を連結させながら、まあね、と白山は苦笑する。

「せっかく気持ちが通じたっていうのに、何がそんなに不満なんだよ」

はくたかとの事を知る唯一の人物であるエフは、白山にとってかけがえのない親友であると共に、唯一の相談役というか、愚痴をこぼせる相手だった。金沢では常に気を張っていなければならないから、この碓氷峠越えが白山にとって大変ながらも数少ない息抜きの場となっていた。

「不満っていうか……僕って、あの人の中でずっと後輩扱いなんだなって思ってさ……」

車両が繋がった後もあちこちと点検しているエフの後ろで、白山は言葉を続ける。
「そりゃ仕方ないだろ。後輩な事には変わりないんだから。生まれた年は変えられないさ」
さあっと二人の間を冷たい風が吹き抜けていく。否、冷たいと言っても冬のそれとは違う、ひやりとした高原の風だ。この季節の太陽の光は地面を温めてはくれるけれど、まだ風まで温めるほどの力は持っていない。
吹き抜ける風にネクタイと制服の裾をはためかせながら、白山は口を尖らせる。そんな白山の事を気にも止めず、よし、と点検を終えたらしいエフは、ホームの端——今、白山が立っている場所のすぐ近く——に設置してある灰皿の横に立つと、胸ポケットからシガレットケースを取り出し、白い煙草を一本くわえて火を点けた。深く深く吸い込んで、白煙を細く吐き出す様は、自分には真似できないなあと白山は思う。
例えば、自分もエフの様にもう少し男らしければ、はくたかも自分の事を頼ってくれるだろうか、等と余計な事まで考えてしまう。
「でも、もう少し頼ってくれてもいいと思うんだよ。どう思う？」
「俺は後輩ってのが居ないから分からんけど……先輩だったら、後輩には弱いところ見せたくないもんじゃないのか？大体お前ならどうよ」
煙草を灰皿に押しつけて消すと、エフは白山の方を見た。
「僕？うーん……そう言われれば、そうかな」
「だろ？ならお前が我慢するしかねぇよ」
まだすっきりしない白山に、腕時計を見たエフが「無駄話は終わりだな」と言う。慌てて懐中時計を見れば、確かに出発時間が迫っていた。
「まあ、運転が疎かにならない程度に考えな」
「うん。有り難う、エフ」
そう言ってお互い自分の車両に乗り込む。エフの力強いモーター音がここまで響いてくるのを聞いていると、昔ここで散々訓練したときのことが蘇ってくる。あの時は目の前が真っ白になるほど雪が降っていた。さすがにこの季節ともなれば雪は消えて久しく、ごく稀に日の当たらない場所に白い名残が残っている程度だ。
「行くぞ」
がくん、とエフに引っ張られる衝撃に身体を揺らしながら、急勾配を上がっていく。本当の春はまだ先なのかも知れない、と思いながら。

❖

あの夏を忘れない

その日の運転を終えた白山は、駅から宿舎へ続く道を歩いていた。最後の電車が出た後はすっかり夜も更けており、駅前は大分暗くなっている。金沢の駅前はいくつかホテルと飲み屋がある程度で、繁華街は駅から少し先まで行かなければならないから、夜が更ければ静かなものだった。

靴がざりざりと質の悪いコンクリートを踏んでいく。辺りに人の姿はなく、等間隔に置かれた電灯の薄暗さに白山の影が伸びていた。

距離にすれば数百メートルだが、宿舎が見えてくるとほっと安心する。玄関から漏れる明かりの所為か、それともそこに愛しい人がいると思うからか。僅かに歩調を早め、白山は玄関に向かって歩いた。

がちゃり、と扉を引いて中に入ると、暖かい空気に包まれる。大勢の人に温められた空気だ。玄関脇にある管理人室からひょっこり顔を覗かせた管理人が、お帰りと言って白山を迎えた。

「ただいま」

初めの頃は戸惑っていたこういうやりとりにも既に慣れて久しい。友達と言うほどではないが知り合いも増えた。徐々に充実し始める白山の生活において、相変わらずはくたかとの関係は何より大切なものだった。

管理人室と玄関を挟んで丁度向かい側にあるラウンジには人の姿はない。テレビも消されてしん、と静まりかえっている。仕方なく階段を上がって自分の部屋へ入ると、制服の上着を脱ぎ、そのままベッドに倒れ込んだ。

今日も一日、無事に運転できたことを感謝しながらも、疲労を誤魔化す事は出来ない。硬いベッドに俯せになっていると、急激な睡魔に襲われる。風呂にも入っていないし、着替えなければ、と頭では思っているのだが、それより先に瞼が落ちてきて白山の視界を遮ってしまう。

気がつけば眠っていたらしい。ふと意識が浮上して目を開けると、まだ辺りは薄暗かった。それでも昨晩何もせずに眠ってしまったと慌てながら、今何時だ、と思いながらベッドサイドに置いてある時計を引き寄せる。

「まだ四時か……」

少し早いなと思ったが、一度覚醒した意識は簡単に眠ってはくれない。それに布団にも入らず眠った所為か、僅かながら寒気を感じた。春といえども油断は出来ないし、いくら繁忙期が終わったばかりとはいえ、風邪を引いて休むわけには行かないと、勢いよく起き上がった白山は風呂に入ることにした。

こんな時、二十四時間開いている大浴場は助かる。部屋に風呂もあるにはあるのだが狭いし、身体を温めるには少し物足りなかったから、白山は良く大浴場を利用していた。

洗面用具などを持って廊下をそっと歩く。まだ多くの人は眠って

いる時間帯だ。以前はくたかから「昼夜構わず廊下を歩く人の足音で叩き起こされたことがある」と聞いてから、気をつけるようにしていたが、それでも木造の建物は所々軋んで嫌な音を立てた。

廊下を降りて大浴場に向かう。脱衣所の灯りは点いていたが、ロッカーに置かれた籠は全て伏せられている。夜行列車の到着時間にも、昼の特急達が動き出すにもまだ早い時間、貸し切りだと少しだけ嬉しくなった。

もうもうと湯気を立てている湯船に浸かると、凝り固まっていた全身が解れていくのを感じる。

少しだけ開けられた窓からはひやりとした空気が流れ込んでいた。五月も半ばともなれば金沢はもう初夏の陽気だ。まだ春の気配が残る信越本線とは大きな違いだった。しかし夜明け前の空気はさすがに冷たく、それが心地良いと白山は思う。

「あー、気持ちいいなあ」

身体を洗ってさっぱりした所で、白山は壁に掛けられた時計に目をやった。最初に気づいたときは、風呂に時計なんか無粋だと思ったが、時間に縛られたここの生活では逆に時間が分からない方が不便だとはくたかが言っていたのを聞いて、なるほどと思った。

時間は午後五時半。そろそろ出た方が良さそうだ。

しっかり身体を温めてから湯船を出た。脱衣所で身体を拭き、部屋に戻ると時間は既に六時を過ぎている。これでは早起きした意味がないなと思いながら、制服に着替えて食堂へ行こうと準備をしていると、誰かがバタバタと廊下を走っている音が聞こえてきた。

その足音は次第に近づいてくる。と、白山の部屋の前でぴたりと止まった次の瞬間、どんどん、と部屋の扉を叩く音が響いた。

「白山!?起きてる!?」

騒々しいノックの音と共に聞こえてきた声ははくたかのものだった。普段穏やかな様子で取り乱すことなど滅多にないはくたかの唯ならぬ様子に、白山は慌ててその扉を開けた。

「どうしたんですか」

ぜいぜいと息を切らしているはくたかが、二度深呼吸して呼吸を整えると、一瞬息を詰めて何か考えている様子を見せた。が、すぐに口を開き、信じられない言葉を吐き出した。

「信越本線が……」

「信越本線が？」

「不通になった、と連絡が入った」

「……え？」

聞き慣れない言葉に、白山にははくたかが何を言っているのか分からなかった。「普通になった」ではなく――例えばいつも冬の積雪に悩まされるあの勾配が、他の路線と比べて普通の角度になったというのなら大歓迎すべき話なのだが――恐らく、通れなくなったという「不通」だろう。こんな朝早くにどんな駄洒落ですかと言いたい言葉をぐっと飲み込んだのは、はくたかの必死な表情からそれが冗談ではない事が分かったからだ。

あの夏を忘れない

「あの、不通って、どういう……」

「土石流が起きて、線路が流されたらしい。まだ長野から一方的に連絡が入ったばかりだからどういう状況なのかは分からないけれど……とにかく、今日の白山は運転見合わせだ。詳しくは上に聞いてみて」

いつもよりも早い口調に、はくたかが焦っている事がよく分かった。しかし白山には未だにはくたかが告げた内容が明確に頭に入ってこないままだった。土石流というものがどのようにして発生するのか知識として知ってはいたが、信越本線の沿線はここ数日良い天気が続いていて、土石流が起こる理由が思いつかない。それが、何故。

沿線の人々の顔が脳裏に過ぎる。彼らは無事なのだろうか。黙り込んでしまった白山にはくたかが落ち着け、と声を掛けてくれたけれど、それすら今の白山には届いていなかった。とにかく、何が起きたのか把握する必要があると、上着を羽織って入り口に立ったままのはくたかの隣をすり抜けると、足早に廊下を歩いていく。後ろではくたかが何か言っていたが、聞き返す事もしなかった。

走り出したい気持ちを抑えつけながら、宿舎を出て駅へ向かう。朝早いとは言え、構内は既に乗客でごった返していた。それらに目もくれず、一目散に事務所へ行くと、白山の顔を見た駅員がおお、と声を掛けてくれた。

「今呼びに行こうとしていたところだ、白山。今日の運転は見合わせだ」

「さっきはくたか先輩から聞きました。信越本線が不通だって……どういう事ですか」

「土石流が起きたらしいんだ。場所は、妙高高原と関山の間。線路が流されて、列車が走れないと」

走れない。その言葉が頭の中に響いたとき、脳裏をエフの顔が過ぎった。他の列車は大丈夫だったのか。まさか一緒に流されたりしていないだろうか。すっと全身から血の気が引いていく。

「他の列車は、大丈夫だったんですか？」

「ああ。朝早い時間だったから、土石流が起きたときにそこを走っている列車はいなかった。俺たちからしてみれば、それだけが救いだよ」

白山の姿を見つけた他の駅員も二人の話に加わる。

「近所に住む人が轟音がしたから見に行ったら、線路が無くなっていたと……」

話を聞いている間にも、事務所内の電話はひっきりなしに鳴り響いていた。また、今日の白山の運転見合わせを告げる張り紙を作成している駅員も見える。いよいよ話が現実味を帯びてきて、白山は身体を震わせた。

「そんな……僕は、どうすれば……僕に何か出来ることはありませんか」

「残念ながら、今はどうすることも出来ない……線路が流されてし

まったのであれば、運転も出来ないんだ……」
力なく首を横に振る駅員に、白山もそれ以上言葉が見つからなかった。ただ、暫くエフにも、信越本線の沿線に住む人々にも会えないということが、何より辛かった。

❖

その日は一日事務所に居座って、状況の確認――つまり電話番だ――をすることになった。列車が動かせないのであれば白山に出来ることは少ない。通常の業務に加えて今回の事故の状況確認と一気に仕事が増えた駅員達の手助けになればと思い、手伝いを申し出た結果だった。
事務室の中に設置された鉄道電話の前に椅子を持ってくると、黒光りのする電話機を見ながらじっと座っていた。けたたましく鳴り響いていた電話は、時間が経つにつれて減っていき、多くの電車でごった返す時間帯になった途端、ぱたりと鳴らなくなった。
時間が経つのがやけに遅く感じ、何度懐中時計を取り出したか分からない。長野局も新潟局も忙しいのだろうが、現地からの連絡がなければ、遠く離れたこの金沢では最新の状況を知ることが出来ない。それが余計に白山を不安にさせる。
今回土石流が起きたという辺りは道路も併走していない場所だ。自分たちが動いていなければ、現地へ向かうだけでも一苦労になる。そんな場所では、復旧に多くの時間を要する事くらい、全く詳しくない白山でも分かる。一体自分は何時になったら走れるのかと再び憂鬱になりかけたところ、目の前の電話が鳴った。
「はい、金沢鉄道管理局です」
「こちら新潟鉄道管理局。現在の状況を連絡する」
白山の返事を待たず、その人は現在の状況を告げた。今回の土石流の原因は、妙高山で発生した地滑りらしいこと。雪解け水によって地盤が緩んでおり、それが土石流となったこと。下流にあった民家も流されていること、そして信越本線は完全に寸断されていること。
それらの内容をメモに書き留めながら、白山の胸は痛んだ。既に死者も出ていると言うから、その被害は相当なものなのだろう。
「……以上だ。なお、未だに付近の地盤は緩く、近づこうにも迂闊に近づけない状況だ。既に調査に訪れた役場職員が二次災害に巻き込まれている。復旧の目処は未定だが、上野から長野までの間は線路が無事なため、長野局と首都圏各局の間では列車の運転を再開するという話も出ているようだ。また何か新しい情報が入り次第連絡する。以上」
「了解しました。引き続きよろしくお願いいたします」